石川淳選集

第四卷

石川淳選集　第4巻（全17巻）

1980年2月7日　第1刷発行©

¥1300

著　者　石川淳（いしかわじゅん）

発行者　緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・精興社　製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

おとしばなし 堯舜 五
おとしばなし 李白 一九
おとしばなし 和唐内 三三
おとしばなし 列子 四七
おとしばなし 管仲 六三
おとしばなし 清盛 七五
ファルス 九一
夢の殺人 一〇三
鷹 一二三

虹　一七九
小公子　二九五
乞食王子　三〇三
家なき子　三一一

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

小說

四

虹　一七九
小公子　二九五
乞食王子　三〇三
家なき子　三一一

小說

四

史に加上といふことがある。あとからできたものをさきにあつたものの上に置くといふ仕組である。堯舜は禹よりもあとからできたものだからこれを禹の上に置く。すでに椅子をえてしまへばしめたもので、たれでもめつたにうごきたがらない。公僕とかいふ大臣輩ですらさうだらう。まして、帝王の特別席で、迷惑らしい顔はしてみせてもゐごこちまんざらでなく、あまつさへ舜には娥皇女英といふ両手に花のオメカケがふたりもできてゐる事情もあり、ついゐつづけの、鼻毛をのばして、ふところほかほかと、このあひだまでは威福そなはつてくらして來た。ところで今日となると、象徴的にはどうやら體面をつなぎとめても、味噌醤油の臺所のはうは、なにぶんにも今日のことだから、さうさうふところ手ではしのぎきれない。人間の世の中に實在性をみとめられた代りに、いいことばかりはないもので、今度は日日のたつきに追はれる因果になる。

「ねえ、翡翠の頸飾も賣つちやつたわ。衣裳もだいぶすりきれたわ。あなた、ぼんやりしてちやだめよ。」

「待て。おれにもかんがへがある。」

オメカケにせつつかれるまでもなく、舜もちかごろはのべつに酒びたりといふわけにゆかず、これにはちよつと窮してゐたをりである。のべつに酒をのみながら收入のわるくない商賣はなにか。いふまでもなく料理屋だらう。大規模のやつは元手がたりないが、小さい腰掛店ぐらゐは、おちぶれたとはいへ、無い袖を振つても都合はつく。舜はさすがに三たび天下をゆづるといはれてもことわつたといふほどの、すずしいきつぷのひとだから、たがのゆるんだ特別席なんぞに未練なく、いざとなると見きりがはやい。龍文の金ぴかの

衣裳から一足とびに引抜きになつて、こいつ、小粋なこしらへで、下町の目貫の場所に出した小料理屋の、板前にすわることはすわつたが、さてこまつた。庖丁がつかへない。大むかしには野ら仕事、漁師のまねごとから、うちでは竈のまへでめし焚きまでしたものだが、みじかいやうでもこの四千年五千年といふあひだ朝夕大膳職の据膳で、なにもしない癖がついてしまつたので、ただの器用まかせでは、おいそれと客に賣物の生きた魚はいぢれない。板前を雇つたのでは、元手がきれる。仕入もやすく、あつかひもらくな食べものは何だらう。まづ豆腐といふところである。それそれと、おもひついた。大むかし、野にかくれた貧棒世帶の高粱酒のさかなには、舜も豆腐が好物であつた。つたへ聞く、豆腐は淮南王劉安の發明に係るものださうだが、舜は生れが加上なのだから、アナクロニズムの心配はいらない。すなはち、新店の淮南亭、扁額には淮南清賞と横に篆書でしたため、軒さきの行燈には豆腐料理と、これはやはらかく草書にくづした。

豆腐料理はなになにぞ。凝つたものには、つぶて田樂、雪消飯、鞍馬とうふ、雲井とうふ、三清とうふ。きどつたものには、光悅とうふ、交趾でんがく、阿漕でんがく、別山燒、松の山、織部とうふ、天狗とうふ、しじみもどき。ちよつといけるのは、淺茅でんがく、青海とうふ、とうふ麪、あやめとうふ、南蠻でんがく、とうふ鮓、みぞれそば、牡丹とうふ、實盛とうふなど、風流のかずはさまざまあるが、どうも手がこみすぎて、江戸のむかしならば知らず、當節のせつかちな口には合ひがたく、それに肝腎の板前にも心得がなく、商賣となると品物も値段もやつぱり今日むきに、當淮南亭の料理獻立は、夏ならば冷奴、冬ならば湯とうふの一式、つまり豆腐を水に浮かせたのと湯に浮かせたのとのちがひで、さんざん凝つたあげくの、率直な味覺に

うつたへることにした。ただし酒はバクダンのカストリのといふ人命をおびやかす品はきらつて、灘の生一本とはゆかなくても、とゝかく一級酒をとゝのへたのは、舜が自分でのむつもりだらう。客の來るよりもさきに、當人がいいきもちに醉つぱらつて、

「さあ、いらつしやい。」

なによりの呼びものは、娥皇女英のサーヴィス、これが絹ごし豆腐よりも當りがよく、熱燗よりも刺戟的で、ひるがへす石榴裙、燃えるばかりの情熱をこめて、藥味の唐がらしよりも猛烈にエロをきかせたから、わーつと押し寄せる客が引きもきらず、毎晩の大入で、おもはぬ利益を見て、舜はますますいいきもちに醉ひつぶれてゐたところ、油斷大敵、わざはひは牆の内におこつて、ある夜突然、娥皇女英ふたりそろつて店からすがたを消した。うちぢゆうの金目のものをさらつて、みごとに隨德寺であつた。

「あつぱれ、おれのメカケだけに進退あざやかな藝だ。」

朝になつて、やつと氣のついた舜が目をこすりながら感心した。寛仁大度である。いや、じつは大あわてにあわてて、そとに飛び出したが、どこにさがしに行くといふあても無い。書置一つのこしてないので、皆目事情がわからず、常連の客の中にスマートなやつでも見つけたか、單に泥棒驅落の流行を追つたのか、それとも他に深刻な煩悶があつたのか、なにしろふたり一度に消えられては、身邊不自由であり、商賣にもさしつかへる。大道直にしてこころ千千にみだれて、のつそりあるいてゐるうちに、ふと堯のことをおもひ出した。しばらく無沙汰してゐるが、帝王の椅子の順では堯は先輩にあたる。あるひは加上のはうでは後輩なのかも知れない。しかも娥皇女英のおやぢといふことになつてゐる。たれでもよくよくこまつたときでもな

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

ければ、めつたにおやぢのことなんぞをおもひ出さないのが人情の自然だらう。堯は舜よりも一足さきに特別席を見かぎつて、近くのヤミ市の中に、何業をいとなむとも知れず、あらたに土木を起して新居をかまへてゐる。ヤミ市といつても、晝は日光、夜は電光、晃晃として文化を照らしてゐる場所である。

堯の家の前に來て、

「すげえなあ。」

木の香あたらしく、堂高三尺の古式にのつとつて、がつちり組み立てた一棟の、入口がとたんに倉庫で、米俵、麥俵、炭俵、酒類はいふにおよばず、棚の上には纖維製品皮革類まで、足の踏みどころもなく亂雜に積みあげたのは、むかしから庭の草もきらない鷹揚な堯の流儀で、なげやりの中にも、やつぱり德分そなはつた王者の威風あたりを拂つた。曠野に、

しづやしづ御階にけふの麥厚し　荷兮

按ずるに、この句はこの光景を詠んだものである。

「堯さん、ゐるかい。」

返事が無い。そのはずである。とても奥まで聲がとほりさうもない。つい扉一つへだてた內側で、きやーつといふ女の悲鳴、いや、歡聲をまぜて、歌ふ聲、酒盛のさわぎが手にとるやうに聞える。

扉を押して、のぞきこむと、

「おう、舜さん、はひれよ。」

堯は膝の上に女を三人のせて、大きいさかづきに波波とつがせて、豚のてんぷらを横かじりにしながら、上機嫌であつた。美青年である。見たところ、舜よりも十歳ぐらゐ若い。よく調べたらば、百歳ぐらゐ若いのかも知れない。舜のオメカケの娥皇女英のおやぢにあたるのだから、さういふ勘定になるだらう。

「いつも、おにぎやかだな。」

「あたりまへさ。おまへさんもちかごろは豆腐とかガ

ンモドキとかでばかな景氣ださうぢやないか。」
「ところが、油揚みたいにぺちやんこになつた。」
「どうして。」
「娥皇女英に逃げられた。」
「ふむ、さすがにおれの娘だ。」
英雄の感慨はたれもおなじである。
「どこへ行つたか、知らないかね。」
「そんなこと、おれは知らないよ。娥皇女英でなくたつて、どの女でも似たものさ。女なんぞはいくらもゐら。ここにも三人ゐるし、となりの部屋には五人ゐるし、そのとなりの部屋には十人ゐるし、外に出て見ると無限にぞろぞろあるいてら。しよげるな。」
「あきらめられない。」
「あれ。あきれたね。古女房が逃げたと聞いたら、どんな男だつて飛びあがつてよろこぶはずだがな。おまへ、運がいいとおもへ。」
「おまへさんとおれとは、どうも女性觀がちがふやうだ。女といつたら、おれは娥皇女英ふたりしか知らない。ほかの女には用は無いよ。たぶん、これが戀愛といふやつだらう。至上主義みたいなきもちだ。」
「勝手にしろ。」
「さういはないで、なんとか智慧を貸してくれ。」
「さうだ、女のことだつたら、禹にきいてみるがいい。あいつは女は專門で、すごく通だ。」
「禹にもしばらく逢はないが、なにをしてゐる。」
「むかしから水に緣のある男で、今日の商賣もやつぱり水商賣さ。場所は大川の流にのぞんで、浮川竹の女樂を興して、依然として水を治めてをるね。」
「さつそく行つてみよう。」
すすめられた酒ものどにとほらず、また外に出て、大川端をぶらぶらさかのぼつて行つた。娥皇女英、何千年といふあひだ日常の重寶にこき使つてゐたやつだ

が、今はこひしくなつかしく、戀慕のおもひ胸にせまり、おかげで舜も可憐なる少年に若がへつて、孔子さへ迷ふ戀の山、しかし川端の道に迷はず、行くほどに、かなたにそびえる新築の甍、日にかがやき、白晝はばかりを知らぬいきほひに、絃歌の聲おこつて、いかにも臨河第一樓の貫祿と見えた。冷奴湯とうふ一式の淮南亭とは、ちよつと規模がちがふらしい。

玄關にあがると、甘つたるいにほひがたちこめて、わつと出て來た女の、いや、ゐること、ゐること、數かぎりなく、鄭聲みだらに、渦まく中を、舜はわき目もふらず、ずつと通つて、奥の一室にはひると、

「まづ、こちらへ。」

禹は長火鉢のまへに大あぐらで、得意の川魚料理かなにかでのんでゐる。

「禹さん。いやに納まつてをるね。」

「名を捨てて實を取る。玉の宮居よりも、これにかぎるて。」

禹は舜の次といふ席順だから、もちろん舜よりもだいぶ年をとつてゐる。それに、どうやら禹あたりから多少の實在性があるのではないかといふ嫌疑をかうむつてゐるだけに、このひと、なかなか人間くさく、顔に脂ぎつて、いふことが嫌味である。そばで酌をしてゐる年增の、うすぎたなく意地わるさうなところを見ると、オメカケではなくて、れつきとした女房なのだらう。れつきとした女房があるといふことは、實在の生活に根をはやしたといふことの、うごきのとれない證據である。このぶんでは、おほきに代議士の選擧なんぞにも立ちかねないだらう。禹にくらべると、舜はぜんぜんこどもである。

「ときに、御用は。」

どうも挨拶の呼吸がちがふ。

「いや、その、女のことでね。」

「なに、女。はつは、そんなことは雑做もない。うちに泳いでゐるやつでよかつたら、いくらでも好きなのを釣つておもちなさい。おのぞみなら、よそから取り寄せてもいい。なあに、むかしなじみの仲だ、遠慮はいらない、ただで……」

さすがに禹もふとつ腹である。しかし、女房はさうはゆかない。

「あなた、なんです、ただとは。調子に乘つちやだめよ。」

「うん、實費でね。實費でいい。」

あわてたのは、舜のはうで、

「大まちがへだ、禹さん、そんなはなしぢやないんだよ。」

「ぢや、なに。」

「娥皇女英が行方不明になつちやつたんだ。」

「へえ、惜しいね、そいつは。あれは上玉だつた。」

「どこへ行つちやつたのかわからない。五千年以來はじめての煩悶だ。戀愛といふものをつくづく實感したよ。」

「古風なことをいひだしたね。」

「途方にくれたよ。」

「そりやさうだらう。戀愛といへば、五千年よりもつと古い。そんなに古いはなしになつちや、見當がつかないのはあたりまへだ。うちぢや今日的な營業方針だから、さういふ品物はあつかはない。」

「お宅ぢや女のことはくはしいさうだが、どこをさがしたら見つかるか心あたりはないかね。」

「さあね。このへんで網にかかつたらのがさないがね。」

そばから、女房が、

「ねえ、娥皇女英さんだつたら、うちではたらいてもらつてもいいわね。さがしておあげなさいよ。」

「ふむ、それもさうだ。さつそくさがしに行かう。舜さん、心配はいらない。うちで引受けるよ。」
「引受けるつて、やつぱり營業方針のくちかね。」
「ああ、今日的に再教育してあげるよ。こつちは商賣だから、まあ親船に乘つたつもりで、萬事よろしくまかせなさい。」
「わあ、ここの船ぢやさだめし底なしだらう。よろしく乘せられちやつたら、こつちが玉なしになる。」
長居はおそれと、あたふた逃げ出した。
「ひでえやつだ。かなはねえ。堯に一杯食はされた。」
舜も目から鼻に抜けるといはれた智慧者だが、戀の迷はおそろしいもので、商賣物の豆腐のカラの、たわいなく、
「人生がいやになつた。自殺したいきもちだ。」
川端にたたずんで、水をながめたが、
「しかし、待てよ。せつかくこれほどおもひつめた上は、娥皇女英をさがし出すまでは死んでも死にきれない。ひと手は借りず、自分ひとりでさがさう。戀の執念つらぬいて、もつと迷ふべし迷ふべし。舜も人也、我も人也。」
たちまち發奮して、それから毎日、豆腐料理はそつちのけで、朝から晩まで店を外に、二食分の辨當をぶらさげて、宛もなく巷にさまよひ出た。
市中廣しといへども東門に行き西門に、北門に走り南門に、隈なくたづねあるいてみると、じつに女はうようよと群れてゐるが、行けども行けども、娥皇女英は見つからない。その代り、毎日あるきまはつたおかげで、盛り場の情勢にはすつかり通になつて、扇をぱちりぱちり、
「けふは竹枝を聽きに行かう。」
注にいふ、竹枝とはブギウギのことである。
ブギウギにあきると、つぎは下町で評判のはだかを

どりに凝つた。これが市中見廻役の棒のさきで散らされてしまふと、つぎは幻燈に凝つた。はだかをどりよりも格段にすごいやつを幻燈にうつして見せる趣向である。この小屋には、なみなみのものは出入を許されない。舜は切符ももたないで、樂屋口からぬつとはひる。大した顏である。それほどの顏になつても、依然として娥皇女英は見つからない。

「どうしてもだめかな。幻燈ばかり見てゐてもつまらねえ。今夜はひとつ身をもつて體驗としやれるか。」

けしからぬ巷に一夜をあかして、あくる朝、世にもあぢきない顏つきで、ふらふらと橋のたもとを通りかかると、そこに大道易者が店を張つてゐる。たがひに顏を見合せて、

「おう、これは。」

許由先生である。そのむかし耳洗ひの賢人として賣つたひとである。

「先生、ひさしぶりだ。ひとつ見てもらふか。」

「なにを見るね。」

「失せものだ。」

「なにが失せたかな。どこにあるか見當はつかないか。」

「あれ、こつちで伺ひを立ててゐるんぢやないか。」

算木筮竹さらさらと、

「わつはつは、何事ぢや、あほらしい。つまらぬものぢや。どこにでもざらにある。箒で掃くほどころがつてをる。目のさき鼻のさきにちらちらしてをる。失せものもこれでは張合がない。見つかつてゐるのに、氣がつかぬといふものぢや。」

「さうかねえ。」

「手荒に取扱つてはいかん。豆腐のごとくもろいな。」

「あ、商賣をあてられた。」

「色が白くて、すべすべしてをる。」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com